



肝に銘じなさい

金曜日の放課後、●●くんと●●くんが後ろの黒板に貼ってある受験カレンダーを見ながら、自分の受験スケジュールを考えていたようだが、さて、面談に向けて「受験カレンダー」は出来上がっただろうか？

第一志望が国立で、それ以外の大学には進学する気持ちがない人でも、できれば予行演習？ということで、私立大学の1～2校は二次試験がある前に受験しておくことを勧めたい。その場合、例えば東大の文Iが第一志望なら、早稲田や慶応などの法学部系を受験するというのが原則だろうし、同じく第一希望が理Iなら、早稲田や慶応などの理工学部系を受験することになるはずである。

まあ、受験料もバカにならないし、受けるならそれにとまって書類を用意しなければならぬし、とりあえず過去問3年分くらいは解いてから臨む方がベターだしということで、それなりの負担は増えることになる。だからこそ、早めにカレンダーを完成させて、できる準備からどんどん済ませてしまうことが大切なのである。

*

ところで、9月にやったマーク模試の自己採点結果と実際の採点の結果の違いが分かる資料を返却したが、実際の採点と自己採点の結果とが「27点」も違う人が二人（一人は自己採点が27点実際よりも高く、一人は27点低い…）いるのには驚き呆れた。が、それ以上に驚きなのが、採点が一致していた人がわずかに「2人」！しかないということである。やれやれ…。

いわゆる二段階選抜を実施する大学の、その選抜ラインが何点くらいになるかというこ

とを、予備校は受験生の自己採点データができるだけ多く集めて予想する。そして、我々はその予想に基づいて、最終的な二次の出願先を決めるわけである。

センターでいい結果が残れば、そのラインなど気にせずに強気に出願することができるわけだが、例えば東大のように、センターで9割近くを取ることが理想とされるような大学では、二段階選抜のボーダーの得点のところに多くの受験生が集中することになる。だから、例えば657点がボーダーなら、657点の人は二次に出願して二次試験が受けられることになるが、656点の人は出願してもその段階で不合格となって二次試験を受験できなくなってしまうわけである。もちろん、予想でない本当のボーダーの得点は出願者の数によって決まるから、出願した後で結果が分かるわけで、予備校の予想では「ダメだろう」とされても、思い切って出願したら大丈夫だったということもあるし、逆に、予備校のボーダー予想が低くて、ギリギリ出願できそうだからというので出願してみたら、結果として二次が受けられなかったということも出てくるわけである。

つまり、君たちが挑戦しようとしている大学は、自己採点の1点で泣くことがあるかも知れない大学だということだ。それなのに、27点も自己採点がズレているようではどうしようもない。

こういう所に、大学入試以前の君たちの「姿勢」が見えるのである。自己採点が異なっているような人には、合格などおぼつかない。そのことを肝に銘じなさい。